



## I 古代の東アジアと海洋交易

8世紀後半、唐国内では安史の乱（755-763年）鎮圧にあたった節度使が独立した勢力として各地域で台頭するなど、中央集権的体制が弱体化し、周辺諸国への影響力を低下させた。また、緊張が続いていた新羅と渤海の関係が緩和すると、東アジア各国の関係は急速に改善していく。

9世紀、各国の緊張関係が緩和し、唐の影響力が低下した一方、新羅では内乱や災害、飢饉が相次ぎ、多くの人々が唐や日本へと渡った。唐へ渡った新羅人は、山東半島から長江河口にかけて居留地を形成した（山内 2012）。在唐新羅人が形成した唐と新羅、日本を結ぶ交易ルートを発展させ、海商を掌握したのが、韓半島莞島に清海鎮を開いた張保臯だった。

日本を訪れた新羅海商の対応は、現地の大宰府が担当した。

831（天長8）年太政官符において、新羅人交易船が来航した際、まず国の検査と必要物品の購入、あるいは京進（朝廷への進上）を行い、その後、大宰府の管理の下で民間と交易を行わせることを定めた（田中 2008）。

鴻臚館は、大宰府が管轄する外交使節の饗応施設、あるいは大陸へ渡る日本使節の拠点として設置された。その後、8世紀末の遣新羅使の廃止、遣唐使の派遣も9世紀には3回に留まり、海商の受け入れが中心的な機能となっていた。

842（承和8）年、反乱を起こした張保臯の暗殺が伝わると、新羅国内の混乱が波及することを恐れた日本は、交易の場から新羅海商を排除した。そして、9世紀後半には鴻臚館交易の主役は新羅海商から、唐海商へと移っていく。

### Tpic 海の英雄 張保臯と清海鎮遺跡

『三国史記』列伝 2 張保臯の条によれば、彼は同じ新羅人の鄭年とともに唐の徐州において武寧軍少将を務めていた。その後、中国から新羅へと帰国した張保臯は第 42 代興徳王に謁見し、新羅人が奴隸として中国へ連れ去られることを防ぐために、海路の要である莞島に清海鎮の設置を願い、王はこれを認めて、1万人の兵を彼に与えたという（828年）。

第 44 代閔哀王が殺害され、国内が混乱すると張保臯は、鄭年に5千の兵を与えて鎮圧にあたり、第 45 代神武王を立てた（838年）。この功績で張保臯は宰相に取り立てられ、鄭年は清海鎮大使となる。841年に張保臯は中央貴族との対立から反乱を起こしたが、偽装投降した閔長に暗殺された。

張保臯が拠点とした清海鎮の位置は、『三国史記』によれば現在の全羅南道莞島にあたり、遺跡が位置する小島の名前と合わせて、「将島清海鎮遺跡」として韓国の史跡 308 号に指定されている。発掘調査の結果、土を突き固めて壁とする版築構造でつくられた総延長 890mを計る城壁や建物跡、祭祀と関連する埋納遺構、接岸施設と考えられる海岸木柵、排水路など多様な施設と多くの遺物が見つまっている。

## II 唐房と博多綱首の時代

9世紀後半からの日本の対外関係をみると、唐との外交が894（寛平6）年の遣唐使廃止で絶たれ、新羅との関係では842（承和9）年に新羅海商の鴻臚館貿易からの排除が始まり、新羅から相次いだ入寇に大宰府が警戒を強めていた時期である。

鴻臚館から新羅海商が排除されると、その穴を埋めたのは唐の海商だった。唐の滅亡後、中国は諸国乱立の状態となり（五代十国時代）、越州に建国された呉越国が日本と通交した（山崎 2002）。960年に趙匡胤が建国した北宋は、979年に中国を統一したが、周辺の遼や西夏などの脅威を受け、陸上の交易ルート（シルクロード）を抑えられていた。そのため、北宋の対外交易は海上を指向し、東南アジア方面を主線としながら、日本との交易も活発化していった（山内 2009）。

日本の対外交易は、10世紀も引き続き鴻臚館で行われた。発掘調査では11世紀後半以降に遺物の出土量が減少し、『扶桑略紀』などに1047（永承2）年の鴻臚館放火の記事があることから、11世紀半ばに廃絶したものと考えられている。鴻臚館の廃絶後、交易の場は博多へと移っていった。

鴻臚館に滞在して交易を行っていた宋商人は、その廃絶後、博多の一角に「唐房」と記録される居住地を設けた（大庭 2019）。鴻臚館で行われた「波打際貿易」に対して、博多に長期居留する宋商人（博多綱首）が行った貿易の形態は、当時の東南アジアに成立した宋人居留地「住蕃」との共通性から「住蕃貿易」と呼ばれている（亀井 1988）。

### Tpic 莞島海底船

莞島海底船は、12世紀の高麗時代、韓半島南西部の海南から首都開城へ青磁を輸送中に、莞島郡の薬山島沖で沈没した輸送船である。調査を通して、海底に残った船体や、30,645点もの遺物が引き上げられている。

船体は海底の泥に埋もれた部分のみが、陶磁器などの遺物と共に残存していた。莞島海底船は、平らな船底で、沿岸に沿って航行する内航船として復元された。

この1隻の沈没船からは、数多くの青磁が引き上げられた。青磁は無文の椀・皿・盤が30,000点以上を占めており、その他に広口壺や梅瓶、扁壺、長鼓などがある。

莞島海底船からは、船員が使用した修理道具なども出土して、高麗国内の流通に従事した船の姿を伝えている。

## III 南九州の古代

### ・南東からの産物

南島（古代日本における琉球列島の呼称）から日本列島へ繋がる動きが文字記録として登場するのは、7世紀のことである。『日本書紀』618（推古24）年3月条「掖玖人三口帰化」などがその例である。『続日本紀』699（文武3）年秋7月辛未条には、南島からの朝貢が記録されている。

時代は下るが、10世紀末から11世紀に右大臣藤原実資が書き残した『小右記』によると、大隅や薩摩の役人から赤木（巻物の軸木や刀の柄に利用）・檳榔（葉を屋根材として利用）・夜久貝等の貢物が贈

られている（渡辺 2012）。夜久貝は、ヤコウガイ（夜光貝）のことで、螺鈿細工の材料として輸出も行われていた。

#### ・南九州産須恵器の流通

9世紀、北部九州の須恵器生産が縮小傾向を示すのに対して、中・南九州では須恵器窯の操業が継続する状況が見られる（石木 2007）。宮崎県内でも下村窯跡（宮崎市）や苺田窯跡（延岡市）といった9世紀に生産が継続する須恵器窯が見つまっている。

鹿児島県の中岳山麓窯跡群も、9世紀中ごろ以降に操業した大規模な窯跡群である。薩摩国衛や国分寺への供給を目的としていたと考えられる一方、産地同定のために行った分析の結果、南九州一帯から琉球列島にまで広域流通していたとの見方もある（池畑 2007、中村・篠藤 2015）。

#### Tpic 下村窯産須恵器と朝鮮半島産無釉陶器

下村窯跡は、宮崎県宮崎市佐土原町に位置している。

150年余り操業した下村窯の須恵器編年は5期に分けられるが、8世紀代（1・2期）と9世紀代（3から5期）の間では、長胴壺の生産開始という画期が存在する。二重口縁をもつ長胴壺は、南九州に特徴的な器種で、高麗陶器では類似する器形を盤口壺・広口瓶とも呼ぶ。この下村窯の長胴壺については、韓半島の統一新羅時代に作られた無釉陶器の影響を受けている可能性が指摘されている。指摘は器形だけではなく、内面の叩き文様を回転調整でなで消すなど、調整技法の共通点にもおよんでいる（大庭 2006）。

## IV 南九州の中世

万寿年間（1024-1028年）、肥前平氏の流れを汲む大宰府の大監平季基が日向国諸県を開発し、関白藤原頼通へ寄進した。都城盆地を中心としたこの荘園は急速に拡大し、日向・薩摩・大隅にまたがる日本最大級の荘園、島津荘が成立する。

11世紀代の島津荘開発に従事した人々の墓と考えられるのが円形周溝墓で、宮崎県では都城市やえびの市、鹿児島県では鹿屋市・始良市・日置市で見つまっている。南九州では系譜がたどれないこの墓制は、南九州以外では肥前国府や筑後国府の周辺に分布している。肥前国では下位の在庁官人やその周辺の有力者が被葬者である可能性が指摘されており、西北九州から南九州への人の流れを示唆している（栞畑 2009、堀田 2010）。

万之瀬川下流域遺跡群は、薩摩半島南西部、東シナ海に流れ込む万之瀬川下流の自然堤防上に位置する3つの遺跡（持躰松・渡畑・芝原遺跡）からなる。芝原遺跡で中世に属する33棟の掘立柱建物跡や、11基の竪穴建物跡が見つまっている。また、12世紀後半の押圧波状文をもつ軒平瓦が出土してい

る。この瓦の出土地点付近で検出された総柱建物跡は、中国人が祖霊を祭った廟である可能性が指摘されている（関・平屋 2012）。

青磁瓶や香炉、白磁の四耳壺や合子、黄釉褐彩盤などの威信財としての性格を持つ希少なものが出土し（関 2019）、商品を運ぶコンテナとして使われた中国産の大型甕が見られる点は注目される。このような出土遺物の状況から、万之瀬川下流域遺跡群が、南九州有数の流通拠点として古代から中世に機能していたことが分かる。

#### Tpic 滑石製石鍋とカムイヤキ

古代末から中世にかけて、北部九州では長崎県西彼杵半島で作られた滑石製の石鍋が調理具として流行した。

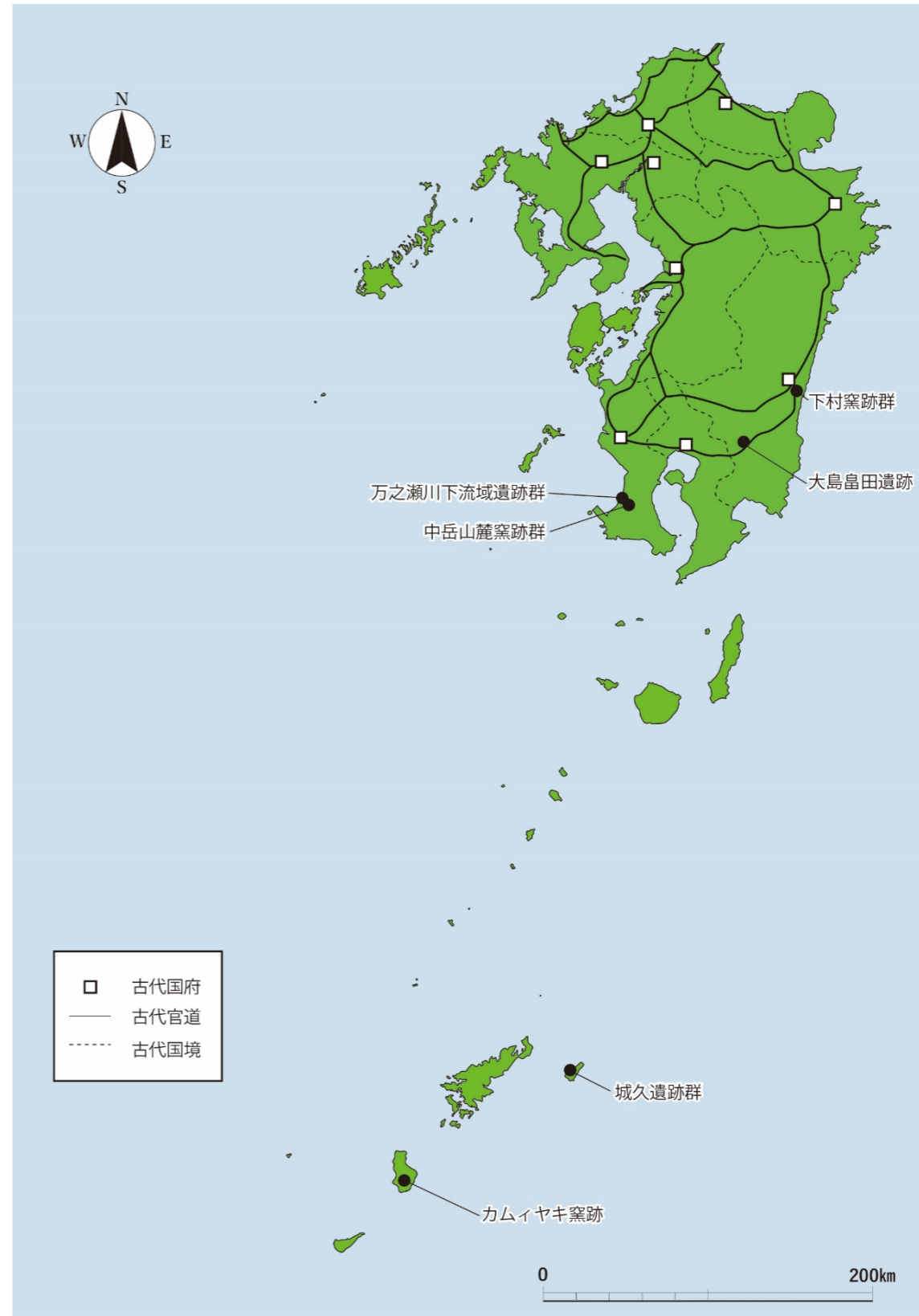
南の琉球列島でも、この石鍋は出土している。琉球列島に分布する石鍋は、方形の耳を持つものがほとんどで、共に出土した中国産陶磁器の時期から11世紀中頃から12世紀代のものと考えられている。この時期は、カムイヤキが奄美諸島の徳之島で成立した時期でもある。琉球列島では初めて成立した窯業であるカムイヤキには、器形や表面の調整に韓半島の高麗に由来する技術的特徴がみられる。

日本列島の中世に並行するこの時代は、琉球列島の時代区分ではグスク時代が始まる時期にあたる。狩猟採集から農耕社会へと移行する段階とされ、窯業だけでなく、農業や鉄器生産の開始など多くの変化が訪れたことが分かっている。

琉球列島の外から物や技術が持ち込まれたことを示す石鍋やカムイヤキは、人やモノの移動が従来の生業や経済、生活の形を変化させ、社会の仕組みを変えていく画期が存在したことを伝えている。



東アジアの航路と関連遺跡分布図  
 (在唐新羅人居留地の位置は金成愛 2012 を参考とした)



九州島および琉球列島の関連遺跡分布図